



南モンゴルの近現代史について講演した(左から)楊海英静岡大学教授、宮脇淳子氏、シヨブチヨード・テムチルト南モンゴルクリルタイ会長＝9日午前、東京都千代田区(辻本奈緒子撮影)

中国当局が南蒙留学生弾圧

都内で集会 高市氏「連帯」呼び掛け

南モンゴル(中国内モンゴル自治区)の独立運動史と展望を議論する国際フォーラムが9日、東京・永田町の衆議院第1議員会館で行われた。

講演した南モンゴル出身の楊海英静岡大学教授は現在、南モンゴル出身の留学生たちが大使館などを通じて中国当局から弾圧される「越境弾圧」が日本で横行していると指摘。そのせいで「留学生たちが萎縮して物を言えなくなっている。これは立派な内政干渉だ」と批判した。

「ロシアとは何か」「世界のなかの蒙古襲来」などの著書がある歴史学者の宮脇淳子氏は、20世紀初めのモンゴルが日本とロシア、清朝の3大国に翻弄され、南北分断に至った歴史を紹介。「日本が非常に大きな影響を及ぼしたことを日本人は自覚しなければならぬ」と強調し、「こうした歴史について日本にいるモンゴル人だけに発言させてはいけない。日本人自身が向き合うべきだ」と呼び掛けた。

政治で命先のドイツから来日中のシヨブチヨード・テムチルト南モンゴルクリルタイ会長は「日本など民主主義国家の支援を受けながら、南モンゴルの独立を達成したい」と述べた上で、世界で唯一、国会に「南モンゴルを支援する議員連盟」を持つ日本への謝意を表した。また中国から世界に輸出されているレアアースは

社説



今年のノーベル生理学・医学賞は、免疫反応の暴走を防ぐ仕組みを突き止め、その役割を担う「制御性T細胞」を発見した大阪大の坂口志文特任教授ら日米3氏に、また化学賞は、極小の穴が無数に開いた「金属有機構造体(MOF)」を開発した北川進・京都大特別教授ら日米豪3氏に決まった。日本の自然科学部門のノーベル賞受賞は4年ぶりの快挙だ。

免疫、素材部門で成果

坂口氏が発見した制御性T細胞は関節リウマチなどの自己免疫疾患、1型糖尿病やがんの治療などに役立つと見込まれる。人間には体内に侵入したウイルス

ノーベル賞受賞

大輪咲かせた原点追求の志

そこで坂口氏は、体内には免疫反応にブレーキをかける細胞も存在し、その細胞を使えば自己免疫疾患を抑えられると考えた。1995年に制御性T細胞の目印となる分子を見つけ、以後は免疫学の大きな研究テーマが、北川氏は97年、金属イオン「無用の用」という思想も知り、

「常」に生命の本質を見据え、真理の窓を開いた。

一方、北川氏が開発したMOFは「多孔性配位高分子(PCP)」と呼ばれ、気体を穴に取り込んで分離、貯蔵することが可能だ。ナノサイズ(ナノは10億分の1)の穴を無数に持つ物質として活性炭が知られるが、北川氏は97年、金属イオン「無用の用」という思想も知り、

「世界は一つ」万博で発信

石毛事務総長 インタビュー 来場者ロコミ追い風に

大阪・関西万博の開幕を13日に控え、日本国際博覧会協会の石毛博行事務総長は、世界は一つというメッ

による弾圧が続いている。人的人権など普遍的な価値を共に守るために連帯を強め述べ、「自由、法の支配、基本」といきたい」と激励した。

追加利上げに不透明感も

植田目銀総裁 5年の任期折り返し

植田和男目銀総裁の5年任期が折り返しを迎え、後半戦に入った。植田氏は就任以来、マイナスイ金利政策など大規模金融緩和の正



インタビューに答える日本国際博覧会協会の石毛博行事務総長＝8日、大阪市此花区